福井県教育総合研究所 紀要 第 128 号
実践報告

学制 150 年記念企画展「学校 150 年物語」

教育博物館

巣守俊彦　柏谷秀一　齊藤洋　西川真代

1872（明治５）年、学制が発布され、日本初の全国統一の教育制度が確立した。令和４年は、学制発布 150 周年の年にあたる。教育博物館では、それを記念し、博物館全館を使用して、半年に渡る当館最大規模の企画展を開催した。

本稿では、各展示室で構成した展示内容および展示資料についての紹介と企画展を通しての省察をまとめる。

＜キーワード＞　学制 150 年　学制　学校　母校　学校の変遷

Ⅰ　はじめに

明治時代になると、政府は教育の充実を通して近代国家の基盤作りをめざし、1872（明治５）年８月２日に、学制（図１）を発布した。この学制は、身分や性別によらず、国民全員が平等に教育を受けられる、現代の私たちが通っている「学校」につながる近代学校制度の始まりともいうべき制度である。この学制は、12 名の委員による起草とされているが、その中に、瓜生寅（図２）と岩佐純（図３）の本県出身の２名が含まれている。

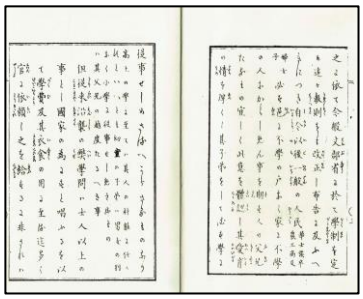

図１　学制　国立国会図書館「近代日本人の肖像」

全国に数少ない教育に特化した博物館である当館では、これを機に 150 年間の本県学校教育の変遷について広く県内外に広報し、未来への教育遺産として継承するため、学制 150 年記念企画展「学校 150 年物語」を開催した。

今回の企画展では、「教育県ふくい」の気運を盛り上げるために、当館が開館以来収集してきた歴史的資料に加え、県内の各学校から資料提供を受け、福井県の学校全体で作り上げ、福井の教育の歴史と特色を全国に発信することとした。

また、自らが学んだ地域や学校には、誰にとっても強い思いが込められており、各学校の変遷、沿革をデジタルシステムにまとめ、既存の校歌検索システムと併せて、自らの学生時代、母校への想い、郷愁に思いを寄せてもらう機会とした。

今回、多くの方に展示を見ていただくため、会期の設定を約６か月の長期間とし、３か月経過後の 11 月からは、一部展示資料をリニューアルし、後期展として新たにスタートした。

さらに、明治期の学校設立に係る特別講演会や懐かしい給食の販売、ピアノ演奏会、アートワークショップなどの関連講座やイベントの実施、懐かしい子どもたちの遊びの展示など、全ての世代を対象とした、誰もが楽しく親しみやすい企画展となるよう工夫した。

図２　瓜生寅（うりゅうはじむ）『福井市史 ：稿本』上 福井市 昭和 16 年 国立国会図書館デジタルコレクション

図３　岩佐純

Ⅱ　企画展の概要

１　テーマ　学制 150 年記念企画展「学校 150 年物語」（図４）

２　期間　令和４年８月２日（火）～令和５年１月 29 日（日）

３　内容

・教育博物館が開館以来収集してきた資料と研究成果を基に、明治５年の学制発布から現在まで 150 年の本県学校教育の足跡をたどる。
・県内小中高等学校、別支援学校に展示資料や写真の提供を呼びかけ、福井県の学校全体で作り上げる企画展とする。
・県内小中高等学校、特別支援学校の変遷（明治初年～現在）を調査し、デジタルシステムとして展示する。
・教育博物館の全展示室と多目的室、廊下を使った展示の他、中庭にも学校での子どもの遊びを展示するなど、親しみやすい大規模な企画展とする。

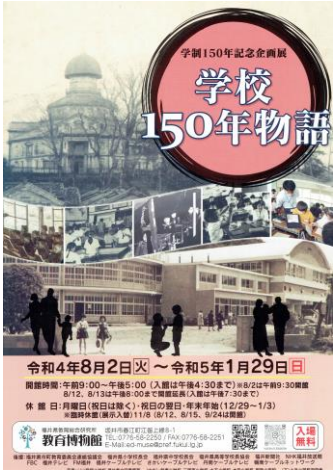

図４　記念企画展チラシ

４　展示内容および展示資料

(1) 近代教育のはじまり

展示室Ａは、常設展では「教育ふくいの歴史」として、幕末から戦後にかけての本県の教育の歴史を紹介している。本企画展では、「近代教育のはじまり」というテーマで、幕末から学制の発布を経て、小学校６年間の義務教育がほぼ実現する明治時代までの資料を展示した。常設展示をベースにし、新たな資料を追加展示して、内容の充実を図った。

特に、寺子屋と学校の両者を比較して、その違いについて理解することができるような展示を心がけた。

①　寺子屋と藩校

江戸時代の後期には商品経済の発達や村、町の自治運営の必要から多くの文書が作成されるようになり、男女を問わず読み書きや計算を学ぶ子どもが増えた。このため寺子屋が増加し、幕末には県内で 400 以上の寺子屋が存在した。寺子屋は庶民の子どもたちが家で果たす役割の合間に学ぶ場所であり、就学年齢や修業年限等に規定はなかった。したがって寺子屋の学習は個別指導であり、師匠が個々の子どもの進度を把握していた。

武士の子弟は藩校で学ぶのが一般的であり、儒学を中心に学んだが、幕末には洋学を積極的に導入する藩も見られた。福井県内では福井藩と大野藩が特に洋学の導入に熱心であった。

②　学制の発布と国民皆学のあゆみ

1872（明治５）年、政府は日本に近代的な学校制度を作るため、学制を発布した。同時に出され、学制の趣旨を宣言した太政官布告第 214 号には、「人が身を立て悔いのない人生を送るため、全ての人が学問を修めなければならない」「学問は国家のためでなく、自分のためであり、学校の教育を受けなければ自立できない。生活のために個人がそれぞれの能力を高めることが学校で学ぶ理由である」という内容が記されている。さらに、「６歳になった男女は就学させなければならない」として、「国民皆学」を打ち出した。

こうして設置された小学校は下等４年、上等４年とされた。体操、唱歌などはそれまでの藩校や私塾、寺子屋にはなく、理科系の科目も一部の藩校で学ばれていただけであり、これらの学習が国民に浸透するにはかなりの時間を必要とした。

また、学制発布当初、できたばかりの小学校の訓導（教員）には、それを養成する師範学校を卒業した者がいなかったので、おもに士族や神官、僧侶、医師など、読み書きや計算ができるものをあてた。記録によれば、在学中の優秀な児童を「訓導補」として給与を与え、教室で指導の補佐をさせていた例もみられる。

学制が発布されると、各府県でも学校の設立と就学が促された。当時校舎の建設は町村負担であり、自分のために学ぶのだからという理由で授業料（月５銭）も徴収された。このため、人々の経済的負担が増え、全国的に学制反対の一揆が起こるなどした。

しかし、次第に教育の必要性が理解されてくると、地域住民や有力者の寄付などにより、徐々に新築

の校舎も建設されるようになった。

学制の理念とした「国民皆学」の実現も長い年月を要した。1873（明治６）年の全国の就学率は 28%程度であり、特に女子ではわずか 15%ほどにすぎなかった。寺子屋では、自分の生活に必要なことを、わずかな負担（師匠への謝礼）で学べたのに対し、多くの保護者は高額な授業料を支払い、しかも生活にかけ離れた内容を教える小学校に子どもを通わせる必要性を認めなかった。

低迷する就学率を上げるため、教育内容が再検討され、各府県では警官を巡視させて保護者を説得するなど、様々な方法で就学が促された。その結果、学校に通う子どもは少しずつ増えていった。

日清戦争（1894（明治 27）～95（明治 28）年）後、政府は教育の振興に一層力を注いだ。1900（明治 33）年に出された小学校令では、６歳から 14 歳までの８年間を「学齢」と定め、尋常小学校卒業までの４年間保護者に児童を就学させる義務を課した。また、公立小学校の授業料を原則廃止することも定められた。授業料の負担がなくなると就学率も急激に上昇し、その後、1907（明治 40）年に義務教育は６年間に延長された。この時点で就学率は 97%と、10 年間で 35%も上昇した。こうして、明治時代の終わりになって、学制でうたわれた国民皆学がようやく実現した。

③　学校で使用した掛図

寺子屋が個別指導であったのに対し、学校は同年齢の子どもが、同じ内容を学習する一斉指導である。当時の錦絵にも教室の様子を描いたものがあり、教師が掛図を用いて授業を行っている。1876（明治９）年に発行された『単語図問答』には、掛図「単語図」を用いて教師がどのように授業を進めるかが具体的に記されており、一問一答方式を採用していたことが分かる。

掛図は、アメリカで作成されたものを参考として作成されていた。そこで、両者を並べて展示することにより、比較がしやすいようにした。

また、掛図は通常、不要になると廃棄されることが多く、原資料は稀少である。そこで当館が入手した掛図『尋常小学読本掛図　巻一』（図５　1898（明治 31）年）を修復し、その中から３点を今回初めて公開した。

図５　『尋常小学読本掛図　巻一』

④　音楽、図画工作のはじまり

学制では、「唱歌」は小学校の 14 番目の教科として記されている。欧米の教育制度にならって導入されたものの、当時は指導できる教師がおらず、教材や設備も不足していた。このため、学制には「当分之ヲ欠ク」とただし書きがあり、実際に授業は行われなかった。

1879（明治 12）年、小学校で唱歌教育を実施するため、文部省直轄の音楽教育研究機関として「音楽取調掛」（現 東京芸術大学音楽学部）が設置された。校長となった伊沢修二は、1881（明治 14）年から３年かけて、日本初の音楽（唱歌）教科書『小学唱歌集』（図６）全３編を編纂発行した。

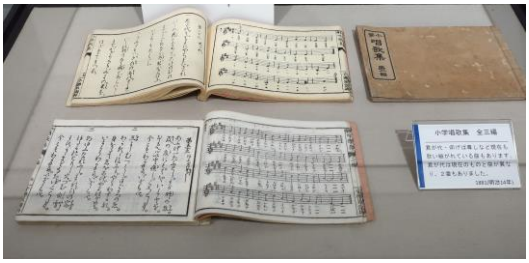

図６　『小学唱歌集』

しかし、これらの唱歌は欧米の曲に文語の詞をつけたものが多く、子どもたちにはなじみが薄いものであった。そこで、文部省では国語読本の教材から 27 首を選定し、曲をつけて 1910（明治 43）年、『尋常小学読本唱歌』を編纂した。これをもとに 1911（明治 44）年から 1914（大正３）年にかけて『尋常小学唱歌』全６冊が発行され、「文部省唱歌」120 曲が掲載された。その中には『日の丸』『ふるさと』『我は海の子』など、現在も教科書に掲載され、歌いつがれている曲もある。

「図画工作」は、もともと「図画」と「工作」別々の教科として始まった。「図画」は、学制発布の際「画学」として始まり、上等小学（現在の小学５年～中学２年）で学んだ。画学には製図の内容が多く含まれており、正確な地図や設計図を作成するための基本を習得することも大きな目的であった。

一方、「工作」は、1886（明治 19）年に高等小学校の「手工」として始まった。これは現在の中学校技術分野に近い内容であり、福井出身の瓜生寅が手がけた日本最初の手工教科書には、木材加工分野で現在でも用いる道具や、ほぞ、掛け接ぎなど、高度な内容が紹介されている。

なお、画学については、明治時代初めの文明開化の風潮のもと、西洋の製図や西洋画の習得が目的とされていたが、明治 10 年代になると岡倉天心らを中心に、伝統的な日本美術を進める運動が盛んになり、1890（明治 23）年頃には毛筆画が鉛筆画を圧倒するようになった。そして、明治 30 年代にはそれぞれの優劣について盛んに論争がなされた。この論争は 1910（明治 43）年、新しく発行された国定教科書『新定画帖』で両者の併用が明記されたため、画学の授業では日本画（毛筆画）も洋画（鉛筆画）も学ぶこととなった。

図７　運動会と遠足、修学旅行

⑤　遠足、運動会、修学旅行

明治前半の小学校には広い運動場がほとんどなかったので、生徒が弁当を持ち、隊列を作って河原や野原、海辺まで行進してさまざまな競技を行った（遠行運動）。これが初期の運動会であり、遠くに出かけることから、遠足の要素も含まれていた。

のちには学校対抗の運動会も開かれるようになり、娯楽的な要素も加わって、保護者の参観も次第に増加していった。その後、運動場を持つ学校が増えるとともに、遠足と運動会は別々の行事となっていった。当時の新聞にも遠足や運動会の様子が掲載されており、展示室では複数の学校が海岸に赴き、運動会を行った記事を紹介した。

修学旅行も当初は会場までの移動、訓練を目的としていた。福井県内で、今日のように見聞を広めることを目的とした最初の修学旅行は、1890（明治 23）年の福井中学校が行ったものである。

当時の新聞記事によれば２週間の日程で東京まで往復するものであり、当時鉄道が敦賀までしか敷設されていなかったため、生徒、引率の教員は１日半徒歩で移動し、川舟、蒸気船等を使い４日かけて東京に赴いた。東京では当時の帝国大学総長渡辺洪基（福井出身）や、元福井藩主松平慶永に面会し、激励を受けた。また上野で開催されていた内国勧業博覧会を観覧するなど、大いに見識を深めて福井に戻ったという。

展示室では新聞に掲載された旅程を白地図に記載するとともに、博覧会の様子を描いた錦絵（複製）を展示し、旅行の内容を紹介した（図７）。

(2) 大正自由教育の展開

展示室Ｂの常設展示では「福井ゆかりの教育者」として、貴重資料とともに橋本左内以下７名を紹介している。本企画展では、「大正自由教育の展開」というテーマで、大正自由教育の前史、福井県内で行われた「自発教育」について紹介した。

19 世紀末期から 20 世紀初期にかけて、欧米では大人が書物を中心にして教え込む教育から、子どもが主体となって自発的に学んでいく教育が広がっていた。

日本でこうした新しい教育が紹介されると、大正デモクラシーの風潮もあり、1920 年代から昭和初期の 1930 年代前半にかけて、子どもの関心や自発性を尊重する教育を行う学校が見られるようになった。このよ

うな教育を「大正自由教育」（「（大正）新教育」）などと呼ぶ。

展示室では三国尋常高等小学校の後身である三国南小学校に残された写真、掛図、機関誌などを展示した（図８，９）。実際の写真ははがきサイズであるが、引き延ばすことにより掲示物や板書の内容が読み取れるので、自発教育の内容が具体的になった。また、特に地理の授業の様子が明瞭に映っている写真は展示室Ｅに設置した。これについては後述する。

図８　三国尋常高等小学校

なお、常設展示のうち、世界で初めてイチョウの精子を発見した平瀬作五郎に関しては、功績について広く全国に発信したいと考えているため、恩賜賞賞牌や著作教科書など、貴重な資料の展示を継続した。

①　前史

1910（明治 43）年、学習院の卒業生である作家、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎などは、同人誌『白樺』を創刊した。彼らは、理想主義、人道主義、個人主義的な作品を次々と発表した。

『白樺』の読者は主に東京を中心とした都市部の人々だったが、彼らの考え方は、教育の世界に自由な教育を行おうとする考え方を生み出した。

図９　当時使用された掛図

新しい教育が注目され始めた 1918（大正７）年、児童文学者の鈴木三重吉は、子どもたちに芸術性の高い童話や童謡を与えたいとして、雑誌『赤い鳥』を創刊した。『赤い鳥』には芥川龍之介、有島武郎、小川未明、新美南吉らの短編小説や北原白秋、西条八十らの詩が掲載され、詩には山田耕筰らが曲をつけた。

さらに、『赤い鳥』には読者である子どもたちの作品が掲載され、児童自由詩、児童画を開発するなど、児童文学の発展に大きく貢献した。

②　三国尋常高等小学校の教育

自由教育の取り組みが全国的に注目される中、福井県内にも、教師が教科書の内容を一方的に教えるのではなく、児童・生徒の自発的な取組みを尊重する教育を行う学校が見られるようになった。

自由教育は多くの場合、師範学校の附属小学校や都市の私立学校での自主的な取組みとして行われた。しかし、福井県では師範学校附属小学校に加え、公立小学校の実践として、三国尋常高等小学校（現在の三国南小学校）の「自発教育」が全国から大いに注目を集めた。

三国尋常高等小学校の自発教育は三好得恵校長の赴任によって始まった。三好校長は福井師範学校を卒業後、附属小学校、奈良女子高等師範学校附属小学校などで新教育の研究、実践を重ね、1919（大正８）年、三国尋常高等小学校の校長となった。以降、1933（昭和８）年に退職するまでの 15 年間、同校は新教育の実践校として全国から注目されるようになった。

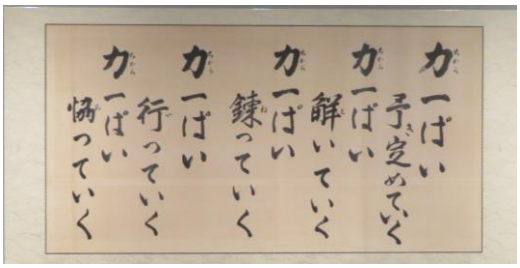

図 10　「力一ぱい」の額

同校では

1　学習題材選択の自由
2　学習方法建設の自由
3　学習材料進展の自由
4　学習資料蒐集の自由

を可能な限り子どもたちに与え、それを「力いっぱいに」

予定（きめ）、解き、錬（ね）り、行い、協力することを目標とした（図 10）。そのため３年生以上に自主学習の時間を設定し、高学年では教室、担当教員を複数置いて異学年、異教科、異教材での自主学習とした。

また、学級自治会や現在の児童会、生徒会に相当する力行会を中心に発表会等を多く実施し、様々な場面で子どもの発達を促した。

昭和に入ると、経済の行き詰まりを背景とした、軍国主義、国家主義が広がり、自由教育は衰退した。しかし、大正自由教育で展開された、児童・生徒が興味をもった内容について自分で調べ、研究していくという学習方法や、教科の垣根を越えて横断的に学習することなどは、現在の「総合的な学習の時間」や「探究学習」でも最も重要な点であり、大正自由教育の精神は 100 年近く経った現在でもなお生き続けている。

(3) 明治～現在の教科書

展示室Ｃは、常設では「教科書の歴史」としているが、本企画展の一部として位置づけるために、「明治～現在の教科書」とタイトルサインを変えた。また、展示室Ｄ「民主教育の始まり」へのつながりを持たせるために、1947（昭和 22）年から 1951（昭和 26）年にかけて発行された、文部省著作教科書（社会科）を一堂に展示した（図 11）。

図 11　展示室Ｃ　展示風景

① 社会科の誕生

終戦後、新しく「社会科」が設定され、1947（昭和22）年９月から全国の小・中学校で授業が始まった。５年生用の『村の子ども』の巻末にある「教師および父兄の方へ」には、教科書が社会科学習の手がかりを与え、学習の進め方を示すものであることが書かれている。そして、「この本に書いてあることを順々に説明したり、暗記させたりしては困る。」として、社会科が民主的な社会を作るための学習方法を取り入れた中核教科であることが強調されている。

小学１年生のものは発行されず、２～６年生向けに、表紙がカラフルで、タイトルも軟らかな表現がされている。「まさお」や「たろう」という子どもの主人公の目線で、農村や都会の生活がつづられている。

中学生、高校生向けは、単元別に各学年６冊の発行が計画されたが、全ては発行されなかった。内容は、小学生向けとは違い、知識事項に重点をおいていたが、実生活や実社会の問題を解決に向けて調べたり話し合ったりすることを勧めるつくりとなっている。

(4) 民主教育のはじまり

展示室Ｄは、常設では「なつかしの学び舎」として、昭和 30 年代の教室を再現して展示している。本企画展では、「民主教育のはじまり」というテーマで、戦後の学制改革による大きな転換期について展示した。展示する際、常設時の昭和 30 年代の教室の雰囲気を壊さないこと、再来館者には新鮮さを感じてもらうために背面と窓側に壁パネルを設置して常設との差別化を図ることの２点を考慮した。以下、展示した各コーナーの内容である。

① 戦時下の教育

「民主教育のはじまり」と銘打った展示だが、戦後の転換をより印象づけるために、まず戦時下の教育の様子を取り上げた。資料として、国民学校の写真、福井市と敦賀市の空襲による学校の被害、国民学校期の教科書に見られる国体主義および軍国主義的教材を展示した。また、教職員にとって目を惹く資料として、教員が国民学校期の教科書に書き込んだ教材研究の記述を展示した（図 12）。教職課程の大学生が見学した際、「現在の私たちと同じこと（教材研究）をしている」との感想を述べていた。

1941（昭和 16）年、小学校は「国民学校」と改められた。子どもたちは、「少国民」として軍国主義

的教育を受けていった。教科書も国民学校用のものが作られた。

12 月には太平洋戦争が始まり、英語は敵性語とされ、学校教育の場から消えた。本土空襲が迫った 1944（昭和 19）年には、空襲を避けるため、都市の子どもたちの多くは、地方へ集団で疎開させられた（学童疎開）。1945（昭和 20）年には、本土決戦に備えて、国民学校初等科（現在の小学校）を除く全学校の授業が停止し、生徒たちは工場に動員された。

図 12　教科書に教員の書き込みが見られる国民学校期の教科書

福井県では、福井市、敦賀市が空襲に遭い、数多くの子どもたちが犠牲になった。市内の小学校も空襲によって被災し、教室、教科書、教具があとかたもなく消え去り、夢や希望にあふれる子どもたちの学びの場が、戦争によって失われてしまった。

② 戦後の民主教育

戦時下の教育と対比的に、戦後の民主教育の概説について展示した。

戦争により、我慢を強いられ、多くを犠牲にした子どもたちだったが、終戦によって、日本の教育制度は大きく変わった。

1945（昭和 20）年 10 月、連合国軍総司令部はそれまでの国家主義教育の中心的な存在だった修身、日本歴史、地理の授業を停止するよう指示した。翌年には、アメリカ教育使節団の勧告で、戦後日本の教育の民主化のための具体的提案がなされた。

1947（昭和 22）年には、教育基本法が制定され、日本国憲法に基づいて個人の尊厳を重んじ、平和と民主主義の実現を目指す教育の理念が掲げられた。学校教育法も制定され、義務教育の小学校・中学校と高等学校からなる６・３・３制の新しい学校制度が始まった。教科書も全国一律の国定制度から検定制度に改められ、各教科で教える内容を定めた学習指導要領に沿って授業がなされるようになった。また、社会のしくみや民主主義について学ぶ社会科が新たに誕生した。

1948（昭和 23）年には、明治期から教育理念とされてきた教育勅語が廃止された。こうして、終戦からごく短期間で、授業を受ける児童・生徒も、行う教員も、それまでの価値観を覆され、現在へつながる民主教育の礎が作られたのであった。

この、民主教育のはじまりを印象づける資料として、昭和 20 年に 20 歳くらいの教員が書いた「授業案」（図 13）を展示した。師範学校で学び、自身も出征し、復員して教壇に立った教員が「教育者としての自己の悩み」と題して自身の心中を吐露した記述である。

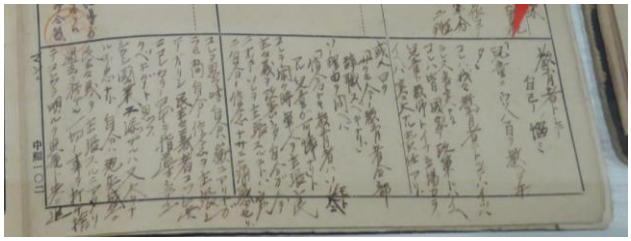

図 13　「授業案」中に書かれた「教育者としての自己の悩み」

「児童にうそ八百を教えていた」これは我々教育者にとってはいつわられぬ事実なり。これは皆国家の政策とはいえ、児童と教師という立場からいえば実に大なる責任あり。或人曰く「少（すくな）くも今の教育者全部辞職すべきなり」その理由を問えば、「信念なき教育者はそのもとにある児童が可憐なり」と。

これを聞く時、軍人を主張し民主主義を攻撃した自分が、今になってそれを主張することは実に自分の信念なさに痛感せり。これを思う時自分は、嶽（正しくは獄か）にありながらも尚自分の信念を主張しておりし民主主義者こそ、真にこれからの日本を指導してゆくべきだと思う。

しかし、国策に添わざるは又大きなる不忠なり。自分は現在盛んに民主主義を主張するに当たり、過

去に於ける一切の事を打ち捨て、これから明るく児童と共に進まん。

一個人の教員が抱いた心情だが、終戦前後で教える内容が大きく変わり、教員としての価値観も変える必要があった時代に、多くの教員が抱いた悩みであったことがうかがえる。

③ 新しい時代の教科書

戦後の民主教育を象徴するものとして、「学習指導要領」の誕生が大きいと考え、展示した。

民主教育を推し進める中で、1947（昭和 22）年、「学習指導要領　一般編（試案）」が発表された。そこには、「新しく児童の要求と社会の要求とに応じて生まれた教科課程をどんなふうにして生かして行くかを教師自身が自分で研究して行く手びきとして書かれたものである」ことや、「この書を読まれる人々は、これが全くの試みとして作られたことを念頭におかれ、今後完全なものをつくるために、続々と意見を寄せられて、その完成に協力されることを切に望むものである」ことが書かれている。「試案」とあるように、これからの時代に応じて改良し、更によりよくしていこうという期待をもったものであった。

「自由研究」の時間も設けられた。「児童の活動をのばし、学習を深く進めることが望ましい」、「児童の個性（中略）を伸ばして行くことに、この時間を用いて行きたい」という理由からである。1951（昭和 26）年の改訂版で廃止され、小学校では教科以外の活動、中学校では特別教育活動と改められた。

また、1947（昭和 22）年５月３日に施行された日本国憲法の解説のために、『あたらしい憲法のはなし』が発行され、新制中学校１年生用社会科の教科書として 1950（昭和 25）年まで使われた。

④ 新制中学校誕生

義務教育である中学校は、現在では当たり前のようにある教育制度となっているが、戦後の学制改革によってできたものである。「新制中学校」として誕生した昭和 22 年当時の創生期の実情は、現在ではなかなか知られていない。そこで、新制中学校の誕生を取り上げた。

戦後の学制改革により、就学年数は小学校６年、中学校３年、高等学校３年と定められた。小学校に加え、新しく男女共学の中学校が義務教育となった。文部省の正式通達が出てから開設までの準備期間は、１か月半という大変短いものであったが、1947（昭和 22）年５月１日に福井県に 179 校の中学校が発足した。誰もが中等教育を受けることができる、という希望と期待をもって始まった新制中学校であった。

しかし、十分な準備がないままに始まった新制中学校の校舎は、小学校での仮住居か、併置校かという「居候中学校」の状況であった。福井市で独立校舎だったのは、福井市第四中学校（現在の進明中学校）しかなかった。これも旧制の高等小学校の看板を替えただけのものであった。寺院、劇場、工場などの施設を仮校舎とした場合もあった。男女共学となったため、トイレの数も足りず、備品も図書も消耗品も小学校のものを借りるほど不足していた。また、教員数、教科書数も不足していた。校舎難、設備難に加え、社会の後援も理解も薄く、物心両面において不足した状態であった。

⑤ 伝染病対策教育

戦後の日本では戦争で悪化した生活により、チフスや天然痘などの感染症（当時は「伝染病」と表記）で多くの人が亡くなっていた。特に、「亡国病」と言われた結核による年間死亡者数は、1947（昭和 22）年、1948（昭和 23）年には 14 万人を超え、大変深刻な状況であった。

そこで、子どもたちに正しい知識を伝え健康を守るため、昭和 20 年代には伝染病に関する内容や題材を数多く掲載した教科書が作られた。当時の教科書を見ると、小学１年から中学３年まで幅広い学年、教科で伝染病について学習していた。理科を中心に国語、社会、家庭、保健体育、更に算数、数学の教科書にも伝染病についての内容が見られる。

戦後の民主教育の流れと組み合わせて展示を行うことで、当時の状況と、伝染病対策に学校や教育が大きく貢献したことをより感じ取ることができると考え、構成を行った。展示と教室の雰囲気が調和す

ることをねらい、展示物として、当時の教科書に加え、教育掛図の中で衛生教育が書かれた部分を展示した。なお、令和２年度特別展「教科書で教えられた伝染病」の内容を踏まえて展示を行った。

⑥ 福井地震

昭和 23 年に福井県嶺北北部を襲った福井地震は、戦後の復興に尽力する人々の暮らしを再度脅かした。被害は多くの学校にも及んだ。平成 29、30 年度の特別展を踏まえて、展示を行った。

1948（昭和 23）年６月 28 日午後５時 14 分、福井県嶺北地方に大地震が発生した。 震源地は丸岡町末政地区といわれている。丸岡町内で死者 637 人、負傷者 3,719 人、全壊家屋 3,286 戸、全壊焼失 1,181 戸、半壊家屋 393 戸、山間部を除いて町内の家はほとんど全壊した。

福井県全体の死者は 3,769 人、家屋倒壊 36,184 戸、半壊 11,816 戸、焼失 3,851 戸であった。

現福井市、坂井市の多くの学校は、震災によって全壊、全焼した。学校の教具も、子どもたちの教科書等も多くが失われた。学校では、倒壊校舎から机や椅子を運び出し、夏期休業を１か月繰り上げて７月中に後片付けを済ませ、早い学校では８月上旬から授業を再開した。全国から救援の手が差し伸べられ、教科書や鉛筆、ノート等が各学校に配られた。校舎再建の動きはすぐに始まったが、その完成は秋頃から翌年までかかった。

校舎が再建されるまでの間、各学校では、校庭に進駐軍から借りた大型テントを張り授業を続けた。テントでの学習は、天候に大きく左右され、雨の日には水のかき出し等も必要とされた。

当時の学校の被害を示すために、壁面に倒壊した校舎の写真、あわら市細呂木小学校所蔵「福井烈震画譜」（複製）を展示した。福井市順化小学校、明道中学校の震災の日の学校日誌を展示し、その日、何があったか、学校はどうしたかを示した。さらに、福井市光陽中学校の出勤簿により、６月 29 日より夏季休業が繰り上がったことや、明道中学校の分校の学校日誌により、地震後に近隣の小学校に分かれて授業を受けたことを示した。

⑦ 学校給食のはじまり

現在の学校で子どもたちにとって楽しみの一つである給食について、戦後にどのようなかたちから始まったのか、ということを展示した（図 14）。

食糧難が続く中、1946（昭和 21）年に、文部、厚生、農林三省次官通達「学校給食実施の普及奨励について」が発せられ、戦後の学校給食の方針が定まった。12 月 24 日には、東京、神奈川、千葉の３都県の学校で試験給食が実施された。翌 1947（昭和 22）年には、全国都市の児童約 300 万人に対し学校給食が開始された。福井県では、1946（昭和 21）年秋にアメリカの援助によって脱脂粉乳が配給された学校もあった。「パン、ミルク、おかず」からなる完全給食が実施されたのは、昭和 25～26 年頃であった。1951（昭和 26）年には、県内の 95％の児童が学校給食を食べるようになった。

来館者の中には、給食で実際に脱脂粉乳を食した方も多く、このコーナーにおいて、互いに語り合い懐かしみ、現在のものと比べる様子が見られた。

図 14 展示室 D 学校給食のはじまり

(5) こどもの遊び

多目的室では、教育の変遷を「遊び」という側面から、時代背景と重ねて紹介する展示とした（図 15）。学校でも家庭でも、「遊び」は子どもの生活の中で学びの原点となるものであり、必要なものであった。展示をとおして、懐かしさとともに、変化を

図 15 多目的室 こどもの遊び

感じ取ってもらえるよう工夫した。

① 学校での遊び

昭和 30 年代～40 年代を中心に、学校の遊具や水筒、弁当箱などの生活道具を紹介することで、それらの変化が分かるような展示とした。また、外遊びの紹介では、写真パネルで展示したり、DVD で当時の様子を放映したりした。

② 玩具を中心とした子ども文化の変遷

明治から平成初期にいたるまで、子ども文化の象徴ともいえる玩具を中心にした展示をした。玩具については、当館蔵も含めて 98 点の実物資料を展示し、玩具の変遷をとおして、当時の時代背景を実感したり、学校で話題になったことを懐かしんだりしてもらえる機会とした。

ハンズオン展示として、復刻版の玩具や当時の雑誌等を展示した。また、昭和 30 年代～60 年代を代表する玩具で遊べる体験コーナーを充実させることで、どの世代の来館者も楽しめるよう工夫した。

(6) ふくいの学校 150 年

展示室Ｅでは、映像や写真とともにまるで「タイムトラベル」をしながら、学制以降 150 年の教育史を明治から現在まで巡れるように構成した（図 16）。明治、大正、昭和（戦前戦中）、昭和（戦後）の各時代に「タイムトラベルゲート」というゲートをもうけ、かつ壁パネルの色を分けることによって、次の時代のゾーンに移動する気分が盛り上がる仕組みとなっている。特にこの展示室では、文章による解説パネルを極力なくし、各時代の学校と子どもの写真からなる Discovery とアーカイブ、解説漫画とすることで、誰にとっても親しみやすく、楽しいものとなるようにした。さらに、展示した写真や解説漫画の中に見られる、石田縞、墨塗り教科書、OHP（オーバーヘッドプロジェクター）、プログラミング教育教材などは、実物資料を展示した。写真資料と実物資料を紐付け、来館者にとって自身の学校での思い出が蘇ったり、新たな発見ができたりする展示となることをねらった。

図 16 展示室 E ふくいの学校 150 年

① 解説漫画

明治５年の学制以降、変化してきた学校の特徴やエピソードを歴史学習漫画風に解説のパネルを作成した（図 17）。興味を喚起し、親子で見て話しやすく、子どもたちだけでも理解しやすくするためである。作中では、「近代教育の創始」、「近代教育制度の確立（国民皆学を目指して）」、「教育制度の拡大」、「戦時下の教育」、「戦後の教育改革」、「新教育制度の発展」、「現在の教育～これからの教育」の７つの展開を、二宮金次郎を模したキャラクター「きんじろうクン」がナビゲーター役を担い紹介していくつくりとなっている。この「きんじろうクン」は、各展示室の入り口サインのタペストリーにも登場し、本企画展を彩るキャラクターとなっている。

図 17 解説漫画

② Discovery

本企画展の開催に向け、県内の小中高校、特別支援学校に、校舎の写真２枚（現在の校舎と、各校所蔵の中で最も古い校舎が写っている写真を各１枚）、生徒の活動写真（授業、行事、部活など、集合写真以外）、象徴する物（校門、校舎、教室、記念碑等）、学校の遠景、その他の写真の提供を依頼した。

その結果、全体で2000枚以上の画像データが集まった。その中から、明治、大正、昭和①（戦前戦中）、昭和②（戦後）、昭和③（高度経済成長期～平成初期）、NOW（現在）の６つの時代の学校生活や子どもたちの様子を表していると考えられるものを抜粋して構成した（図 18）。なお、使用する写真は、県内全ての学校を挙げての企画展であることを意識し、県内 17 市町を網羅した。

図 18　Discovery

③　明治・大正の子どもたち

ここでは、AI を利用して、明治・大正の子どもたちの白黒写真をカラー化した。来館者にとって隔たりのある明治・大正のような過去を、カラー化によって、自分の存在した時間のように感じることができるのではないかと考えた。子どもたちの姿を生き生きと展示するために、写真は当時の服装が分かるもの、活動をしているもの、集合写真の中で表情が分かる一部分を使用した。Discovery で使用した写真との重複はないようにした（図 19）。

図 19　大正の子どもたち

同コーナーには、絵図および写真の子どもたちの姿を等身大で切り出したカットアウトパネルを配置し、リアルな存在感を演出した。明治ゾーンでは『開化童子往来』の石盤をかついで登校する児童の様子のカットアウトパネルで、明治の石盤石筆体験コーナーとのつながりを持たせている。また、大正ゾーンでは、三国尋常高等小学校（現三国南小学校）の石田縞の袴を履いた女子児童のカットアウトパネルで、大正期に女子教育が盛んになったことを示している。

④　明治・大正の教室

明治と大正のゾーンでは、当時の教室を再現したコーナーを設けた。タイムスリップ気分の中で、当時の教材や教具に触れて学校体験をしてもらうためである。

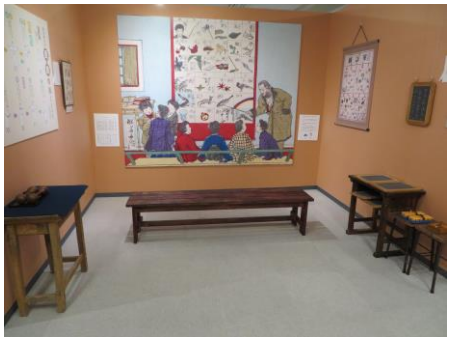

図 20　明治の教室再現

明治ゾーンでは、『小学入門教授図解』を児童の身長の実物大に合わせたパネルにより教室を再現している。さらに、木製亜鈴および石盤石筆の体験コーナーを配置した（図 20）。

大正ゾーンでは、三国尋常高等小学校（現三国南小学校）の授業の様子の写真を実物大パネルにし、その前に木製学習机のレプリカを配置した（図 21）。この写真は約 100 年前、県内で特に盛んに自発教育を行っていた三国尋常高等小学校での授業の一場面である。教師が黒板前に座り近くの児童と話しているが、他の児童はそれぞれが設定した学び方で学習を進める様子がみられる。現在の学校現場で見られる探究学習と重なる部分があることを、来館者に読み取ってもらうことをねらっている。

図 21　大正の教室再現

⑤　アーカイブ　あの頃の学校

県内学校から提供された写真の中から、時代を象徴するベストセレクションを、プロジェクターを用いたシアター形式で上映した（図 22）。

展示室内の２箇所に配置して、明治、大正、昭和（戦前戦中）で 50 枚、昭和（戦後）以降で 53 枚、計 103 枚の写真を選択した。１枚につき約５秒間映し出し、１コーナーを５分程度で見終わるように設定した。映し出す画像に付随するキャプションは、活動の様子を簡潔に記したものと、旧学校名と現学校名にとどめた。それにより、写真が印象と記憶に残ることをねらった。

図 22　アーカイブ　あの頃の学校

⑥　学校の変遷

近年、学校の統廃合が進むことによって、統廃合された学校の過去の変遷をたどることが難しくなると予想した。そこで、令和３年度、県内全ての学校に対して変遷を調査し、検索システムを委託製作した（図 23）。開館時からの人気展示である「校歌検索システム」のプログラムを利用しており、タッチパネル形式で使いやすい展示となった。若狭町立明倫小学校や、丹南高校のように令和以降に統廃合された学校は、学校名によって検索ができるようにした。現在の学校名がわかれば、過去に統廃合した学校についても、遡れるようになっている。このような県内全ての学校の変遷をたどることができるシステムは、全国でも類を見ないものと思われる。貴重な学校資料の保存と展示公開ができるものであり、今後も活用を期待する。

図 23　学校の変遷検索システム

⑦　学校の写真

Discovery およびアーカイブのコーナーで使用した県内学校の写真は 235 点（一部の写真は重複）であり、本企画展のために県内学校より提供された写真は 2000 枚以上あるが、Discovery およびアーカイブだけでは、全ての写真を活用することができなかった。母校に関わる展示物を求める来館者のニーズに応えるため、提供された全ての学校の写真を使用し、PowerPoint を用いて、学校ごとに提供された写真をスライドショーにまとめ、BGMを付け、デスクトップモニターで検索、視聴できる形にした。これによって、来館者が自分の母校の写真を見ることができるようになった。来館者が繰り返し母校の写真を再生して懐かしむ様子が見られ、アンケートでも母校の写真が印象に残った、という声が多く挙げられた。

⑧　学校分布図

50年前の昭和47年に、福井県教育委員会および福井県市町村教育委員会連絡協議会主催で、学制 100 年記念展が開催された。その際、「明治８年敦賀県学校分布図」（橘弥代治氏作成）と「昭和 47 年福井県教育関係施設地図」（佐野光臣氏作成）が展示された。この２点が、令和３年はじめに当館に寄贈された。今回、この２点に加え、令和３年度の県内小学校分布図を作成し、３点を並べて展示した（図 24）。およそ 150 年前、50 年前、現在の３つの時代の学校の分布図を比較することで、学校数の変化を見ることができる。また、学校の変遷システムと併用し、システムで母校の起源となる学校名を検索し、分布図で明治８年時にどこに位置していたのかを見て楽しむことができるようになっている。

図 24　学校分布図

(7) 後期展

本企画展は、半年という長期にわたる開催のため、会期の半分が経過した 11 月９日（水）より、一部展

示資料を入れ替えて「後期展」とした（図 25）。８月の開会時に行った広報の効果が薄まってくると推測できる時期のため、再度広報を行うこと、会期前半に一度来館した方が再来館するように働きかけることがねらいである。後期展で一新した展示内容を以下に記す。

図 25　企画展チラシ（後期展）

① 旧制大野中学校

関連講演会「小学校設立から福井県尋常中学校成立まで」に紐付けて、旧制中学校の一つ、旧制大野中学校を取り上げて展示した（図 26）。大野高校同窓会「明倫会」が旧制大野中学校当時の多くの資料を所蔵していたためである。

「旧制中学校」は、1886（明治19）年の中学校令によって設立され、戦後に学校教育法が施行される 1947（昭和 22）年まで男子に中等教育を行う学校の一つであった。福井県にはかつて、福井、三国、大野、武生、敦賀、小浜の６つの県立中学校と、私立の北陸中学校、あわせて７つの旧制中学校が存在した。

旧制大野中学校は、現大野高校の前身の一つである。その歴史は、大野藩７代藩主の土井利忠によって 1844 年に開かれた藩校「明倫館」に遡る。1871（明治４）年の廃藩置県により藩校明倫館が閉鎖され、1881（明治 14）年に大野町立明倫中学校が開校した。しかし、1885（明治 18）年に、１県１校制により明倫中学校は４年間で廃止された。その後、1901（明治 34）年４月に、福井県立福井中学校大野分校が大野郡大野町亀山に開校された。1905（明治 38）年４月福井県立福井中学校から独立し、福井県立大野中学校となり、その歴史は戦後の学制改革による新制大野高校発足まで続いた。

② 学校系統図

展示室Ａ「近代教育のはじまり」から、展示室Ｅ「ふくいの学校 150 年」に至るまで、写真および実物資料で各時代の学校や教育について展示をした。しかし、各時代にどのような種類の学校が成立していたのか、義務教育は何年であったのか、という概説を読み取ることのできる展示をしていなかった。

そこで、後期展より、展示室Ａ前廊下に明治期から現在までの学校系統図を配置した（図 26）。来館者が展示室Ａ～Ｅを見た後の帰路でこの学校系統図が目に入ることで、各展示室の展示内容がどの学校制度を踏まえた時期のものであったのか、ということを再確認できるようになっている。

図 26　左：学校系統図、右：大野中学校の展示

③ 展示室Ａ　掛図

当初展示した掛図（複製）２点に代えて、『School&Family Charts vol.19』および『博物図第一図』（いずれも複製）を展示した。これらは、前期展で展示した『School&Family Charts vol.21』と『博物図第二図』以上に類似性が強く、明治初年の小学校教育が欧米の教育内容を参考にしていることがより明確に示されている。

原資料を展示した『尋常小学読本掛図　巻一』は、資料保護と季節との関連を考慮し、資料を入れ替えて展示した。

④ 展示室Ｂ

前期展で展示した写真の中に当館で修復した掛図が映り込んでいたことに多くの来館者が関心を持ったため、これらを同じ展示ケース内に展示し、一目で当該掛図であることが分かるようにした。また、三国南小学校から寄託を受けた掛図『植物学教授用掛図』（全８巻、同校ではそのうち４巻を所蔵）が東京農工大学科学博物館に保管され、一部が展示されていることを知ったので、同館の協力を得て全巻

の画像データをいただいた。

展示ではそのうちの２点をパネル化して展示した。なお、同館に経緯を説明したところ、通常上級学校で利用されている掛図が、地方の公立小学校で用いられていたことにかなり驚いた様子だった。

⑤ 展示室Ｄ『生い立ちの記』

展示室Ｄ「民主教育のはじまり」では、福井地震の資料に代わって、福井市明倫中学校所蔵『生い立ちの記』を展示した。2008（平成 20）年、福井市明倫中学校の体育館倉庫から、41 冊の文集が見つかった。昭和 24～31 年に在籍した生徒が夏休みの宿題で書いた作文、1973 人分が綴られたものである。

「生い立ちの記」や「我が家の記」といったテーマで、自分や家族について紹介していく中で、1945（昭和 20）年に福井空襲を体験したこと、長く苦しい戦時下を生き抜いてきたこと、復興のさなかの 1948（昭和 23）年、福井地震でまた家族や家を失ったことなどが、自筆でしたためられている。

どの作文にも、激動の時代を生き抜いた子どもたちの思いが生々しい言葉で表現されており、当時の様子が目の前に立ち現れてくるかのように思われる。

どんな解説よりも、子どもたちを襲った災難や、当時の価値観や思いを表すものと考え、後期展で１つのコーナーを設けて展示した。

⑥ 展示室Ｅ ＋Discovery 特色ある県立学校の取り組み（図 27）

展示室Ｅでは、各時代の Discovery に加えて、県立学校の特色ある取り組みに焦点を当てて写真を集め、＋Discovery とタイトルを付け、パネルを作って展示した。８月より展示されていた Discovery パネルでは、県立高校の写真が少なかった。そこで、当館が県立の施設であることも踏まえ、また、未来に向けた今後の発展を来館者に見てもらいたいと考え、展示に至った。

図 27 ＋Discovery 特色ある県立学校の取り組み

５ 関連イベント、講座

本企画展に関連したイベント、講座として、下記のものを開催した。

(1) DVD 上映会「懐かしいむかしの暮らし」

会期中の土日祝日、10 時、11 時、14 時、15 時の４回のスケジュールで、展示室Ｄにて DVD 上映会を実施した。各回 30 分程度の上映時間であった。DVD は、「NHK アーカイブス 回想法ライブラリー」であり、1940～70 年代の暮らしを描いたものである。この上映を目的とした来館者もおり、自身の学校生活と重ねて楽しむ様子が見られた。

(2) アートワークショップ

工作講座として、夏季に「針を使わない和綴じ本を作ろう」を、冬季に「国語教科書の挿絵をエコバッグに描こう」（図 28）を、中学生以下対象に実施した。

① 夏季「針を使わない和綴じ本を作ろう」

９月 17 日（土）,18 日（日）に、１日各２回、計４講座で和綴じ本作成の講座を行った。和綴じ本作成の講座は、さまざまな場で実施されているが、今回は、中学生以下を対象にしていることから、針の代わりにつまようじ、絹糸の代わりに太めの紐を用いた。通常は千枚通しで開ける穴も、穴開けパンチを使用することで、大きな穴になり、小学校低学年でも自力で作業ができる仕組みとなった。また、紙は和紙ではなく、コピー用紙を用いることで、破れにくく作業がしやすいようにした。

図 28 「国語教科書の挿絵をエコバッグに描こう」作品

参加者は、４回で計 26 名、引率 29 名であった。未就学児の参加者もいたが、土台となる和綴じ本を引率の保護者の助けのもとで作成し、色紙による飾り付けをしてもらうことで、楽しんでもらうことが

できた。

② 冬季「国語教科書の挿絵をエコバッグに描こう」

12 月 17 日（土）, 18 日（日）に、１日各２回、計４講座でエコバッグ作成の講座を行った。エコバッグ作成の講座はこれまでにも開催してきたが、本企画展に関連づけて、国語教科書の挿絵を模写するというテーマで実施した。

参加者は、４回で計 35 名、引率 34 名であった。参加者は、それぞれ挿絵の見本から好きなものを選び、無地のエコバッグに布用クレヨンで描いていた。小学４年生以下の参加者が多く、幼稚園児も参加しており、「スイミー」や「モチモチの木」などの教科書教材の挿絵が多く選ばれていた。

(3) 解説授業体験「懐かしい　むかしの学校」（図 29）

９月 23 日（金・祝日）および 10 月 29 日（土）に、過去の企画展の内容を活用した解説授業体験を行った。音楽、社会、国語で構成した。音楽の時間は、福井大学教職大学院　北典子氏（元当館職員）を講師として、令和元年度企画展「時を超えて出逢う 唱歌と童謡～懐かしの音楽教科書～」について、芳賀矢一を中心に授業を開催した。社会の時間は、当館職員により、令和２年度企画展「地図を見る、読む、楽しむ～地図から社会を見てみよう～」について、今昔マップや鳥瞰図を用いて授業を行った。国語の時間は、当館職員により、令和元年度企画展「～もう一度読みたい～国語教科書」について、明治以降の国定教科書の歴史を中心に授業を行った。

図 29　解説授業体験　懐かしい むかしの学校

(4) 「懐かしい学校給食」

当館の開館以来、来館者より「給食を食べたい」という要望が挙がっていた。しかし、設備等の問題により、給食を作って提供することはできなかった。今回、あすわの実（社会福祉法人　足羽福祉会　足羽ワークセンター）に依頼し、委託販売の形をとることによって、給食の販売が実現した。メニューは、「ソフト麺ときなこ揚げパン」（図 30）および「復活！開化（開花）丼」（図 31）である。「ソフト麺ときなこ揚げパン」は、給食の人気メニューであることから採用した。「復活！開化（開花）丼」は、常設展「むかしの学校映像」内の「県政ニュース」に、「かいかに（開化煮・開花煮）」という給食メニューが見られることに着想を得た。明治以降に日本に入ってきた玉葱と豚肉を卵でとじて丼とした。現在も福井県内で給食に登場するメニューである。実施は、10～１月に土日を１回ずつ、計８回とした。事前予約も受け付け、11～13 時の間に取りにきてもらうようにした。当館では初めての試みであり、どれくらいの数が売れるかを予測することが難しかったが、実施初日（10 月 29 日）には事前予約も多く完売し、購入した方がすぐに次回の予約を行う様子も見受けられた。

図 30　ソフト麺＆きなこ揚げ

図 31　開花（開化）丼

(5) 特別講演会「小学校設立から福井県尋常中学校成立まで―福井県の学校教育形成史―」（図 32）

11 月 26 日（土）に、当館の研究協力委員である熊澤恵里子氏（東京農業大学教授）による特別講演会を開催した。県内約 50 名の教育関係者、一般の方が参加した。

1872 年の学制発布により、数多くの小学校が設立された福井県域であったが、その後、県境変更や県の統廃合という状況が重なった結果、福井県域は政治的、財政的に不遇の時代となった。1881（明治 14）年の福井県置県以後に、ようやく小学校の就学率が上昇した。

熊澤氏は本講演会にて、福井の人々がどのように地域の学校を護り、発展させていったのかについて、福井県域の小学校設立と普及に尽力した学務委員や地域の人々の活躍、中学校形成を支えた旧藩の人脈、中学校から上級学校進学の育英組織を支援した旧藩主家を中心に話をされた。さらに、小学校設立では大野と福井、中学校形成では小浜と福井、育英組織では越前松平家の関連資料など、多くの文書を参加者にわかりやすく読み解く形で紹介された。そして、「福井の学校教育は、藩校以来の公共の精神と人々の熱意に支えられた」とまとめられた。

図 32　熊澤恵里子氏　講演

Ⅲ　省察・現状分析

今回の企画展開催期間中の来館者数は、7,580 名であった。来館者の年齢構成（図 33）、は、成人が 60.6%、高齢者が 11.6%と、大人が中心であった。小学生は 16.8%だが、これは、家族単位での来館と、学校単位での校外学習・遠足によるものである。開館以来、令和元年度までは、高齢者施設やデイサービスによる利用が多かった。しかし、令和２年に発生したコロナ禍により、高齢者施設等の団体の来館はほとんどなくなっており、令和４年度も回復していない。そのため、高齢者の来館は、家族単位や個人に限られている。

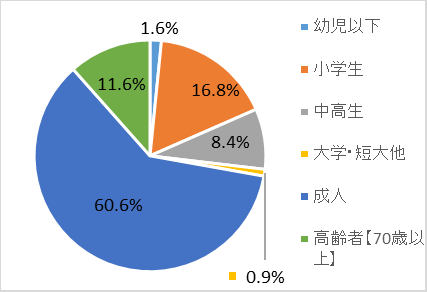

図 33　来館者の年代構成

アンケートの記述より、企画展に対する評価は、4.63 であった。満足度（図 34）は、「満足」が 66.2%、「やや満足」が 28.8%という回答であった。約 95%の方が、「満足」または「やや満足」した結果となった。今回の企画展では、「県内小中高等学校、特別支援学校に展示資料や写真の提供を呼びかけ、福井県の学校全体で作り上げ」たため、福井県内のどの地域から来館された場合でも、母校または自身の地域に関した展示物を目にすることができた。また、「明治５年の学制発布から現在まで 150 年の本県学校教育の足跡をたどる」展示としたこと、「全展示室と多目的室、廊下を使った展示の他、中庭にも学校での子どもの遊びを展示するなど、親しみやすい大規模な企画展」としたことで、高齢者から子どもまで、広い年代で満足できる展示となった。これらの要因により、高い満足度に繋がったと考える。

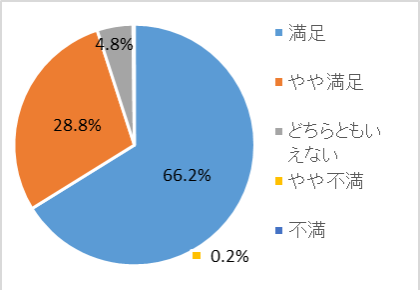

図 34　満足度

さらに、来館者の居住地（図 35）は、博物館近隣（あわら市、坂井市）が 20%、嶺北が 71%、嶺南が１%であり、計 92%が県内からの来館である。県内であるにも関わらず、嶺南地域の方の来館が少ない。そこで、嶺南地域の方が展示を見ることができる機会を作るため、令和５年度に嶺南地域での出張展示を計画している。

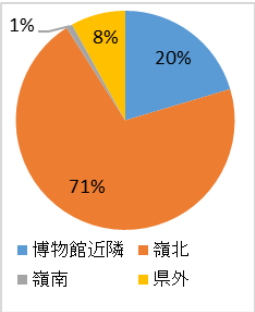

図 35　居住地

また、アンケートでは、以下のような感想が書かれていた。

・どれも興味をひかれたが、特に展示室 E の「ふくいの学校 150 年」において学校ごとの様子が観られたのがよい。学校ごとの年表についても知りたい。学校給食の変化が時世の様相の影響を受けているのがわかりやすかった。休校になった学校のピアノを今博物館で実際に手に触れられるので時代を感じられる。（20 代 女性）

・校歌だけを聴きに来たのですが、中の展示室もまわってみたら、資料が豊富で興味深かった。歴史の学習

に生かせそうだと思った。(40 代 女性)

・90 代の祖母が懐かしそうにしていました。(40 代 女性)

・古い写真をカラーにしてあってよかったです。身近に感じられます。たくさんの資料、展示、大変だったでしょう。ご苦労様です。入り口の校歌検索も、よくまとまっていてよかったです。(60 代男性)

・江戸期、戦前戦後と教育や教育具の歴史をみることができ、とてもうれしいです。これからの教育を考える時間が与えられたことに感謝いたします。ありがとうございました。(70 代 女性)

アンケートの記述からは、当館での展示資料や、ハンズオンなどの展示方法に対して好意的な意見が挙がった。150 年間の学校教育の歴史を追ったことや、県内の各学校の資料を収集して展示したことなど、今回の企画展で魅せたいと考えた部分が、来館者にとっての印象に残るものとなったと考える。

一方で、以下のような意見も挙がった。

・昭和戦前の教育についての展示が少ない。教育が戦争遂行にどうかかわったのか、マイナス面もきちんと触れるべき(60 代 男性)

・旧水産学校、旧農林学校の展示もほしかった。(70 代 男性)

・もっと広報をすれば来場者増が期待できる。博物館としてのクオリティは高いので。(10 代 女性)

ひとつひとつの時代や分野、校種の展示資料が少なくなってしまった点は、今後の展示における課題としていきたい。また、広報についても、開館以来の課題である。今回の企画展では、これまで以上に、チラシの配布、新聞やテレビ、ラジオ、県内広報誌といったメディアや、幅広い層が活用する SNS（Instagram）での広報を行った。来館のきっかけ（図 36）は、①新聞、②テレビ・ラジオ、③広報誌、④チラシ・ポスター、⑥SNS を合わせて 61％となる。残りの約 40％のうち、半数の 21％が「⑤家族や知人からの紹介」、10％が「⑧通りがかり」による来館であった。今後は、①～④、⑥による来館者の増加を目指していきたい。

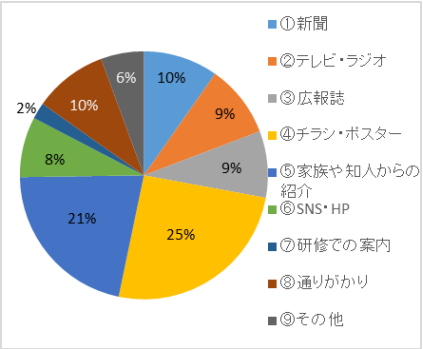

図 36　来館のきっかけ

Ⅳ　おわりに

1972 年９月５日から９月９日にかけて、福井県学制 100 年記念展が「福井県の教育～回顧と展望～」を展示主題として、福井駅前の福井放送会館３階ホールにおいて開催された。会期５日間の記念展であったが、期間中の参観者は約１万人を数え、すこぶる盛況であったという。主管となった県教育庁指導課は、開催決定から約半年間に、県内各学校、公的機関および県民の所蔵資料調査を行い、700 点余りの出品物を集めた。短期間に収集、展示が可能だったのは、各市町教委や学校の協力と支援の賜物であった。

今回の 150 年展においても、教育博物館の収蔵資料のみではなく、県内全ての学校から約 3000 点余りの実物、写真等の資料の提供を受けた。このことにより、県内全地域の学校教育の変遷を網羅することができ、県下一円からの来場者全てが、自らの学んだ学校、地域の学校について親しみを感じることができた。まさに、県内の学校全体で創り上げた企画展である。

今回の 150 年展では、「寺子屋の図」「龍翔小学校模型」など 50 年前の 100 年展に出品した資料も数点展示した。特に、「明治８年敦賀県学校分布図」（橘弥治氏作成）、「昭和 47 年福井県教育関係施設地図」（佐野光臣氏作成）は、約 150 年前、約 50 年前の県内における学校の分布を比較することができる貴重な資料である。今回さらに、令和３年の分布図を作成し、150 年にわたる移り変わりを明確にした。このように、今回の展示では、各時代の状況を把握するだけではなく、150 年間の変化、変容、変遷を意識した展示とした。

さらに、急速な時代の流れとともに、教育も大きな変化を遂げている。100 年展の際にも、教育機器の展示や実演を通して「これからの教育」について考えている。現在は、情報化やグローバル化、ICT 化など当

時以上に、社会の変化が速く、10 年、20 年先の予測が困難である。50 年先の学校教育の姿は想像もつかない。しかし、どの時代においても、学校教育の中心は子どもたちであり、教員、保護者、地域は子どもたちの健全な育成を望み、支えていくことに変わりはない。学制発布 200 年を迎える福井、日本はどのように発展しているのか。50 年後の社会が平和で、子どもたちの楽しむ教育、引き出す教育が実現されているよう念願している。

最後に、今回の記念企画展開催にご協力、ご支援いただいた各学校、関係機関の方々に、心より感謝申し上げる次第である。

参考文献

（1）福井県教育史研究室（1978）『福井県教育百年史第一巻通史編（一）』福井県教育委員会
（2）福井県教育史研究室（1979）『福井県教育百年史第二巻通史編（二）』福井県教育委員会
（3）福井県教育史研究室（1975）『福井県教育百年史第三巻史料編（一）』福井県教育委員会
（4）福井県中学校長会（1957）『福井県中学校十年史』
（5）大野高校六十年史編さん委員会（1965）『写真　大野高校の歩み』福井県立大野高等学校創立 60 周年記念事業実行委員会
（6）福井県（1994）『福井県史通史編５　近現代一』福井県
（7）鉄道友の会福井支部（2013）『わだち』第 146 号～151 号　鉄道友の会福井支部
（8）福井県中学校長会（1957）『福井県中学校十年史』
（9）文部省（1947）『学習指導要領　試案』
(10) 福井県教育研究所（1973）『学制百年記念　座談会記録　福井県の教育のあゆみ』
(11) 三国南小学校百年史編集委員会（1973）『三国南小学校百年史』創立百周年記念事業推進委員会　代表吉田武夫